牛橛造像記（ぎゅうけつぞうぞうき）

北魏（ほくぎ）・495 年

（教科書50･51 ページ／140 ～ 144 ページ）

概要・特徴

中国の北魏時代に、龍門石窟（りゅうもんせっくつ）の古陽洞（こようどう）の内壁に刻された銘文である。495年、亡き息子・牛橛（ぎゅうけつ）の冥福を祈るために、母親が弥勒（みろく）像と銘文を刻させた。銘文には、息子の安息を願う祈りの言葉が記されている。原石は、古陽洞北壁の上層部に現存する。

刀で鋭角的に刻された点画や方勢（ほうせい）（角張った字形）などから造像記特有の迫力が感じられ、北魏時代の楷書の典型として、その特徴がよく表れている。

造像記について

「造像記」とは、仏像を造るときに、その由来を刻した銘文のことである。発願者、制作者、紀年などを記す。中国の北魏から唐（とう）代中期に至る石窟寺院内に刻された仏像に添えられたものが多い。

龍門石窟は中国の三大石窟（敦煌（とんこう）・雲崗（うんこう）・龍門）の一つであり、世界文化遺産に登録されている。「牛橛造像記」のある古陽洞は、龍門石窟の中で最も古く、書の名品が集中している。龍門の造像記の中でも、とりわけ書法的に価値の高いものを「龍門四品（しほん）」などとよび、「牛橛造像記」は「龍門十品（じっぽん）」「龍門二十品（にじっぽん）」に含まれている。

時代背景

中国の南北朝時代には、隷書（れいしょ）に替わる公式書体として、楷書が広く用いられた。

北魏は、5世紀の半ば頃に周辺各国を平定して華北（かほく）の統一を果たすと、第6代・孝文（こうぶん）帝（てい）の頃に隆盛を極めた。孝文帝は、国策として仏教の振興に努め、北魏の都・洛陽（らくよう）郊外の龍門山に大規模な石窟寺院を造った。唐代と並ぶ仏教文化の最盛期を迎える中で造営された龍門石窟には、楷書で刻された造像記が多数見られる。この時代は、石窟や自然の岩山などに刻された書が多く、その独特の書風は、後世にも影響を与えた。